

203

特254

192

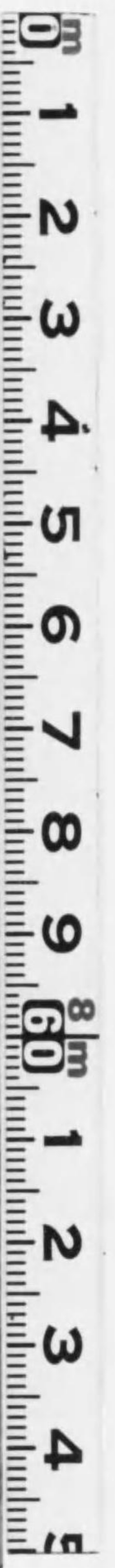
國

をあげて

立憲養正

會日に取来

田中澤ニジ



始

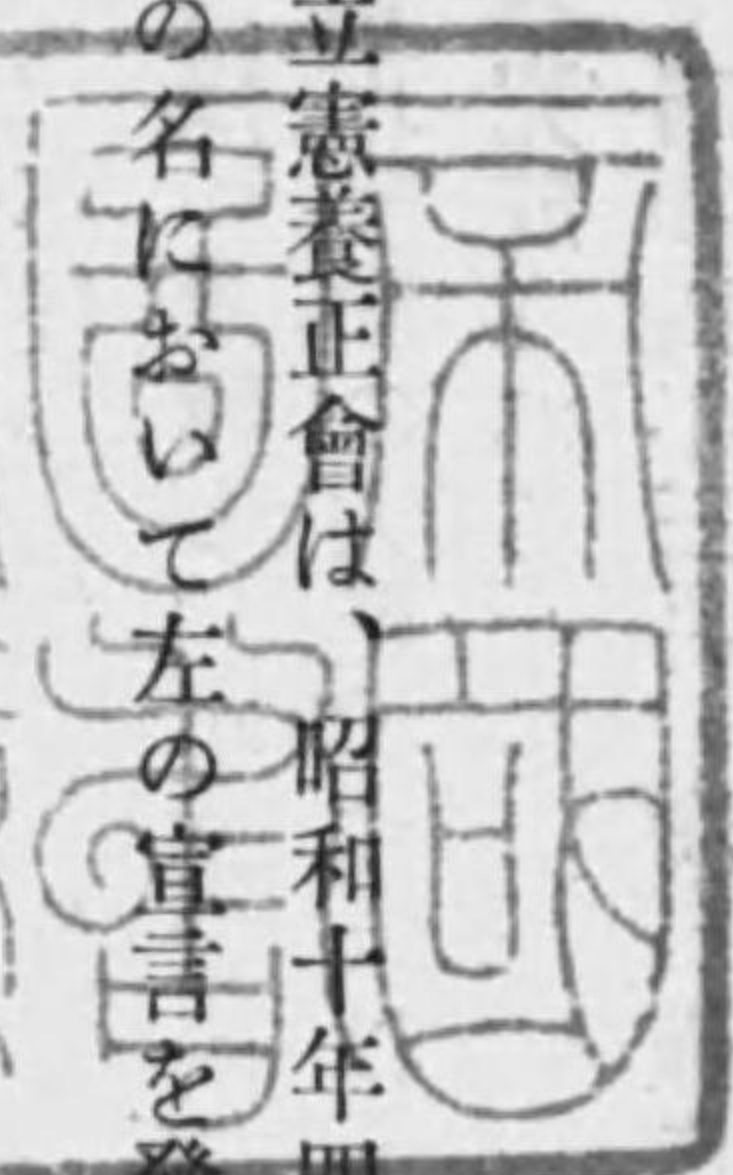


特254
192

國をあげて立憲養正會に聚れ

田 中 澤^{タケ}ニ^ジ

立憲養正會は、昭和十年四月、天長節奉祝大運動を舉行するにあたつて予の名において左の宣言を發した。



立憲養正會は、天皇中心の政治の確立によつて日本を改造し、國民すべて天皇の御意を奉體し、天皇の御事を奨順する、正しく新しき日本を建設せんとする政治團結である。

これまでの政治はすべてあやまりである、その謬りによつて、國は紊れ、民は苦しみ、日本建國の大理想は忘れられた、あやまれる政治を一掃して



この國を正し、萬世ゆるぎなき 天皇の御國大日本たらしめん事は、吾等忠誠なる國民の、護國の責任である、護國は畢竟して事業である、事業は空想でない、されば目的を貫徹して、その理想を實現せんが爲に、我等は養正護國の大業に、身命財産のすべてを捧ぐるものである。

事業には、強大な團結と、完全な組織と、徹底した方法と、確實な期限と、不變の方針と、嚴たる統制と、みごとなる融和と、驚くべき執着と、無限の永續と、事業實現の確信とがあつて、はじめて事業は完成される、養正護國の大業、すなはち新日本の建設は、この、我等の確信によつてのみ完成される。

昭和四年三月、會員僅に一千五百十七人にすぎなかつた立憲養正會は、昭和十年三月三十一日現在において、四十五萬四千四百九人の會員を有し、七百十三の單位支部（一町一村一支部の原則によれる支部）三十五の市、郡聯合支部（直接單位支部を統轄する支部）十六の選舉區聯合支部（單位支部と市郡聯合支部とを統轄する支部）を有するに及んで、事

業の基礎漸くにして成つた、黙々としてたゞ會員をつくつて來た事は、この強固なる團結によつてのみ、よくこの國を救ふ事ができると信じたからである、今こそここに、（この國を護りうる者の姿）を、我が同胞の前に示して、この事業に對する、全同胞の、熱烈なる賛同を促し、その全體的なる参加を求めんとするものである。

我等は近き將來に於いて、日本の政局を、我等の手によつて左右せんとするものである、すなはち、昭和十五年の總選舉において、我等は衆議院の多數を制せんとするものである、今その前提たる昭和十一年の總選舉を前にして、に我等の全貌を我國家と同胞とに示さんが爲に、「天長節奉祝大運動」を舉行して、一舉に日本を席捲し、世界に宣傳して、敢て奉祝の微誠を擧げ奉らんとするにあたり、先づ立憲養正會の存在を明示してひろく全國同胞の賛同をこひねがふ。

この宣言書中にあらはれた数字の會員數と支部數とは昭和十年三月のものである、昭和十年十二月二十五日現在においては會員數は五一七〇五七人、九二七の單位支部、四十八の市郡聯合支部、二十五の區聯合支部に達してゐる。

簡単な文字ではあるが、立憲養正會に就ての全般的叙述としては、極めて重要な文書である。劈頭まづ立憲養正會の理想と目的と事業とを示して、その團結の根本的性質を明かにすると共に、我が同胞の、立憲養正會に對する注意を喚起したが、それについて、我が國民の最も深き考慮と省察とを希望したいとおもふのは「護國」といふことである。

一、護國と愛國

國をおもふといふ態度に二つある、一つは護國で一つは愛國である、世間普通には、愛國といふ言葉がつかはれてゐるが、予は護國といふ言葉を極力普及したいとおもつてゐる、愛國といふ言葉は恐らく日本に固有なものではなからうとおもふ、何だか西洋くさひにほひがする、その上この言葉はどち

らかといふと感情的な言葉だから、必ずしも實行をともなつてゐるとはいへないから、責任的な言葉ではない、勿論全然實行にならないとはいへないがなつたところが、その感情は得て沸騰的なものだから、果してその實行が永續されるかどうかは疑はしい、さういふと氣の毒なやうだが、この四五年來起り來つた、種々なる愛國的行動のその後をみればその事はすぐ分る、要は愛國といふ感情は、主として個人的なものだから、その個人的な感情を、普遍的なものにし、實際的なものにし、國民全般のものとして爆發させなければ、愛國的感情におけるその時々ときの發揚は、發揚には違ひないとするも、同時にそれは勢力の消耗でもあるから、犠牲の大きいわりには、存外効果がいふ事になる。

大體、愛國といふことは、日本だけに限つた事ではない、外國の人もそれぞれその國を愛するのである、だからイギリスにはイギリスの愛國があり、フランスにはフランスの愛國があるにちがひない、さうしてみれば、ドイツにもイタリーにもロシアにもあるので、何も日本に限つた事ではない、して

みれば、これはどこにも共通的な國のおもひ方といふべきもので、日本に限つた事ではない、ところが我々には、日本に限つた特別な國のおもひ方があるのである。

愛するといふ事は、同等なもの、或は同等以下の者に對しては適當な感情である、親が子を愛し、男女が愛しあふといつたあんばいに發動して尤も妙であるが、子が親を愛し、家來が主人を愛するといふのは、日本人としてはヘンである。

私共日本人が國をおもふといふのは、たゞ自分の國だから愛するといふのではない、尊い國、大切な國、特別な國としておもふのである、これが日本國民としての國のおもひ方で、隨てかういふ思ひ方は、愛國といふ言葉ではいひあらはせないのである。そこで護國といふ心と言葉と態度とがあらはれてくる。

國をおもふといふ事が、感情、すなはち愛國であれば、なんにもしずつにただ、おもつてゐるだけでも勿論愛國だらうし、或はまた何等かの行動に移さ

なければ満足できないとするも、ある愛國的行動に出さへしたら、出ただけでそれで自分の心は満足されるやうである、隨つて必ずしも成敗は意とするところでないかも知れない、たとへば愛國的熱情が爆發して、この國を害ふ者を除かうとするやうな事がある、勿論これは結構な事だが、しかし、除いたあとがどうなるかといふ事については、これまでの二三の事實についてみると大してそれを問題にしてはゐないで、何はともあれ先づこれを除かなければならないと思ひ、そうして、除いたあとは多分どうにかなるだらうとおもつて、あとの事を大して苦しめてゐない、かういふのは、その志を壯として讚嘆するには値ひするが、しかし、責任的な行動であるとはいへないやうである、つまり、愛國的行動といふものは、行動になりさへすればいいので、その行動の連續、繼續、永續、綜合、協力、完成などといふことを必然的な條件とはしてゐないので、隨つてその愛國的行動は、概して一時的のものになりやすいのである。

護國となるとそれがさうはいかない、國をたゞ思ふといふのでなくつてこ

れは護るといふのだから、護れなかつたら責任が果せない、そこでどうしても護るといふ仕組みにしなければならぬことになる、護るといふことには「救ふ」「助ける」「全ふする」、などといふ意味があるが、日本帝國の本質と現状についていへば、救ひ、助け、全ふしなければならぬ性質と情勢であることは、すこしく國をおもふものにはすぐ分ることだらう。

二、護國は畢竟して事業である

そこで宣言の中において喝破し高調した、「護國は畢竟して事業である」といふ一語がきはめて重大なものとなるのである、事業とあれば、それは必ず達成されなければならぬ、勿論達成されない事業も、達成しなくてもいゝやうな事業も、世の中には澤山あるやうだが、達成されるに越した事はあゝるまい、況んやこゝにいふのは護國の事業だ、これは必ず達成されなければならぬ、事業の「事」は「營む」といふ事で、事業の「業」は「成す」といふことである、「事を成すを業といふ」と、古書にもあつて、「成る」といふ

はできあがること、「成す」といふはできあがらせることである、「そこで「護國は事業である」といふことは、國をすくひ、たすけ、全ふすることを成し遂げるといふことになるのである。

そこで日本は、「護國」でなければならぬわけを、更に説く必要がある、日本の建國は、世界人類に對して、大きな希望を與へたものである、世界の平和とか、人類の幸福とかいふ事は、たれしも希望するところではあるが、どんなあんばいにしたら平和がくるか、人間が幸福になるか、についてはだれも考へてはゐない、また、だれがさういふ仕事をするか、どんな風に責任をもつかに至つては更に分らない、それを、日本建國の當初において喝破したまふたのが 神武天皇にましますのである、そうして、世界一家といふ理想を現實にすること、それが世界の平和と幸福とを招來する方法であり、その責任者が 日本天皇にまします事をも、明かに宣示したまふたのである、その御事業の本據として出來たのが、この日本帝國だから、これが、日本帝國の、國としての最尊最貴の理由なのであるが、日本を神國と考へる人たちも、

その神國たることを、以上にいふ様な實際的なものとしてはあまり考へてゐないやうだし、随つて、一般國民、中にもなまじ智識のある者などは、全然さういふ事を知らないし、知らせてもまた信じようとはしない、そこで此國をおろそかにする様な考へが、此國の上下にかなりにはびこつてゐる、殊に、西洋とさへいへば、無條件で先進國だときめてしまふやうな人間が、非常に多いので、日本の現状は、恐しく非日本的なものになつてしまつた、だから建國の理想精神などいふものは少しも考へられてゐない、これはいはば純正日本に對する忘却と失念なのだから、先づこの事から日本を救ひださなければならぬ。

そこへもつて來て、政治の間違ひといふものが、この國を甚だしい亂離の状態にしてしまつた、政治といふものは國を治めるべき筈が、却つて紛糾のものとつたといふのはまことに妙な事だが、政黨政治即議會政治といふことについての思想的なかつ根本的なあやまりの外に、政黨政治といふ名を利用して、ある一部の利益をはからうといふ、政治といふ事とはおよそ反對な立

場^ばにたつ犯罪者^{はんざいしや}の群^{ぐん}れが、この國の政治の中樞^{ちゆうしゆ}にたつことになつたのだから、國が紊れ、民が苦むのは當然だが、勿論政治の本態^{ほんたい}ではない。

政治といふ名があり、政治家と名のるものがありながら、かういふことになるといふのは殆ど解釋に苦む次第であるが、不思議に人はこれを疑はふともしない、結果についてはいつも不満を感じながら、政黨者流のしてゐる事はそれでいゝと、どうやら思つてゐるらしいのだから、我々としてはまことに始末に困るのである、名だけで満足する、すこしもその實質實體の何たるかを問はない、これが現代の國民のもつてゐる、恐らく弊^ひの根源かもしれな

いがしかしこれではどこまでいつても、國が治まり、國民が安定する時はないから、まづこの政治のあやまりを除くべく、その原因を探究すると、小さな理由はまだ外にもあるかもしれないが、何よりもまづ明治維新の精神と理想とが、明治以後の一切の政治の關係者に分らなかつたといふことが根本の原因である。

明治維新の大業^{たいげふ}と宣示^{せんじ}とは、神武建國の大理想に完全に呼應^{こへう}せるものであ

つて、それは過去の日本のすべてを整調して、神武建國の大理想に集中させ、國といふ、天皇の機關をば完全に行使して、いよく日本建國の目的達成の第一歩をふみださんが爲の維新の大業だつたのである、維新そのものは、さういふ積極的願望によつて成されたのであるが、こゝに悲しきくひちがひがあつて、天皇の御意思と臣下の者の考へとが全然一致しなかつたが爲に、日本としての外國文明の攝取のしかたに、根本的な間違ひがあつて、一般臣民の考へた開國といふことは、天皇御開國の御趣意に反し、つひに西洋崇拜の陋習を、根強く國民の頭にうゑてしまつたのである、その弊の本となるものが、西洋政治の取入れである。

明治以後の政治の衝に立つた人たちが、日本國體の尊嚴といふものを、實質的にハッキリ知つてゐなかつた爲に、西洋の政治と日本の政治とを、どんなあんばいに調和させるかが分らなかつた、だから、何もかもむかふの者に教へられるつもりで取入れてしまつた、いくら形式をむかふにとつても、精神は當然日本でなければならぬのに、天皇と國家との關係に不明であつ

たその時の者等によつて、一種變態の日本ができてしまつた、だから政治がうまくゆかない。

そこへもつて来て、前にもいつた、政治を私の爲に利用して悪事をする悪人たちが出来て来て、その悪事を樂に行はふとしての集團をさへつくつて、出ては大臣であり、入つては政黨の領袖といふやうな者が、悪い事の仕放題をしたのだから、國に政治といふ名はありながら、國のおさまりがうまくゆかない、その爲に年中國内がガタビシしてゐる、と共に、その政治家の私の爲めに、國民の生活といふものが極度に蹂躪されるから、もう二十年位も、國民は生活難のドン底に沈んでゐるといふありさまである、國難といへばまづ非常な國難で、危機といへばまづ申分のない危機だ、ほうつておいたら此國はどうなるか、この國民はどうなるか、國家と國民とは第二の問題だが、日本天皇の御偉業はぜんたいどうなるか、そこで護國の運動が起らなければならぬのである、すなはちこの國を、救ひ、助け、まもり、全ふさせ、それらの條件のすべてを完全にできあがらせる事業がはじめられなければなら

ないのである。それが護國の事業である。

つまり此國をどうにかしなければならぬのである、するについては、おぼせなければならぬのである、國をおもふといふ事が、一時の感激や昂奮や發動ではいけないのである、だからどうしても事業でなければならぬ、そこで「護國は畢竟して事業である」と、予は宣言において喝破したのである。

同時に、國のおもひ方といふものについて我々は、尤も根本的に考へなければならぬ、たゞ漠然と國といふものを考へると、とかくに人間の居所としての國といふ風に考へたがる、さうすると、日本と西洋との違ひといふものが、さう大したものでもないやうに思はれるかもしれない、さうすると、護國といふ事が、何となく身にしみないかもしれない、いくら道義的な尊い國だからといつても、理義の上でさう感じることは、國民生活の實際的熱情とはなりにくいのだ。

この國は 天皇の御國である、これが一番大切な國のおもひ方である。

天皇のみ國とおもふ時に、祖先以來護國の忠誠に養はれて來た國民には、いふ可らざる感激があるのだ、況んやこの國のみだれ、それは國民としてだまつてみてゐられる事ではない、どんな苦難にぶつからうとも、 陛下の御爲に、この國を護り奉らなければならぬ、そこで我等は、我が同胞に對して、「たゞ 天皇の御爲に起て」とすゝめるのだ。

三、事業の完成と完成の條件

事業といひ、事業完成といふことは、口ではいひやすいが、實行となるとさて仲々容易でない、況んや完成だ、できあがらせるのだ、これは仲々容易でないが、たゞし組織が立ち、方法がたち、確信がつけば必ず出来る、すなはち事業完成といふ事には必ず完成の條件があるから、その條件さへ具備すれば、どんな大事業でもできるのである。

その事業完成の條件といふのは、次にかゝげる十ヶ條である、たゞしこれが條件の全部ではない、まだ外にもあるが、それは近日發行の「立憲養正會

團結の意義並に特質」の中に詳述するからこゝには略するとかく十の條件

- 強大なる……………團結
- 完全なる……………組織
- 徹底せる……………方法
- 確實なる……………期限
- 不變なる……………方針
- 嚴たる……………統制
- みごとなる……………融和
- 驚くべき……………執著
- 無限なる……………永續
- 事業實現の……………確信

これが揃はないと事業はできない、小さな事業はできても、護國の大業といふ如き大きな事業はできない、護國の大業といはないまでも、いやしくも國家民生について、とやかく考へたりしたりしようとする政黨には、かうい

ふ條件のいくつかはなければならぬのだが、たとへば第一の「強大なる團結」についていつてみても、政友會や民政黨が強大な團結であるとは義理にも思へないようなもので、先づ第一の條件さへそうだから、随つて、それ以外の條件なぞありつこない、たゞし政友會は前議會では二百四十の代議士をもつてゐた大政黨だから、「強大な團結」に該當するのではないかとおもふ人があるかもしれないが、それは違ふので、大は大かもしれないが、けつして「強」ではないのだ、強でなくつて大であるとする、時としてこれは小といふ結果より悪い事になる、いはゞ、病氣になつた大きな豚といつたわけのもので、それでは持ち運びにも困る、「病める巨豚」は、大ではあるが強ではない、それに、本當の事をいふと、政友會や民政黨など、ある塊りには違ひないが、團結なぞいふべきものではない。

比較的まとまりのいゝ政友會でさへさうだから、其他はおして知るべし、先づ政友會をはじめ、その組織は不完全をきはめ、方法など何の持ち合はせもなく、期限などは考へもしまし、考へつくわけもなく、要するにたゞ

ワイ／＼連が利権をめざしての集りだから、統制など無論あるわけがなく、たとへば總裁といふも名ばかりで、しかも明かにそれに對立し、いふことはきかず、おまけに大會だか總會だかとにかく會員多數集合の席上で、總裁を面罵するといつたありさま(田中義一氏が政友會の總裁の時、胎中某に面罵された事がある)總裁と會員との間でさへそうだから、黨員同士の利害相反すれば、忽ちに血で血を洗ふありさまだ、こんな事をいつてゐればキリがないからやめるが、とにかく予の數へあげた條件など何一つない。

既成政黨はまづ以上の通りだが、それじゃあ無產政黨はどうかといふと、これは、既成政黨以上に多分のインチキ性をおびたもので、随つて以上の條件なぞ、あるわけもないし、第一、話てきかせたつて分りもしまい、恐らく「嚴たる統制」の一條に對して、フワツシヨ的だとか、英雄主義的だとかいふ批評をする位なものだらう、そつういふ連中には、事業といふ事など、語つても分らないのだ。

さて、立憲養正會は、以上の諸條件をつぶさに備へて、護國の念願を達成せんとする團結である、ついでには、どんなあんばいに備へてゐるかを、簡單ながら説明しておきたい。

「強大なる團結」……強い團結でない、不屈不撓の事業はできないが、しかし、強い團結といふだけではいけない必ず大きくなければいけない、小さい團結では、どんなに強からうとも、護國の大業はできない、それは、護國の大業成就といふことが、古今に類のない大きな建設だからである、その大きな建設は、あらゆる材料とあらゆる人とを網羅して、その完全なる協力一致によつてはじめて出来る、だからこの大は、絶大の大を意味してゐる、無類に強くてこの上もない大きな團結といふ事である。

それでは養正會が、どんなあんばいに強大であるかといふと、それは組織方法、期限、方針、統制、融和、執着、永續、確信、等の九ヶ條を具有するといふことが、おのづから團結の強大を説明してゐるのであるが、その外に特に注意を乞ひたい事は、この強大な團結をつくりあげつゝある方法である、先づ養正會では常住不斷に會員をつくる運動をしてゐる、地方支部の先

進者は、日夜に會員をつくる事に奔走してゐる、しかも増加會員數の豫定を年々にたてて、その豫定にかなはせる實行をしてゐる、現在五十二萬の會員だが、昭和十一年中にはこれが百二十五萬になるといつたあんばいにふやしてゐる、かういふ事は、いかなる團結においてもいかなる事業においても恐らく例のない事だらう、かうしてドシ／＼つくられ集められる會員は、嚴たる一つの中心に統整されて、訓練教育の結果、金鐵よりも堅い會員となる、これが強大なる團結である。

「完全なる組織」……強大なる團結であればあるだけ、組織は完全でなければならぬ。立憲養正會本部の各機關の整備はもとよりだが、(この説明は略す)別して地方の組織において養正會は、類と眞似手のない方法をとつてゐる、それは支部の組織である。「單位支部」といふのは、一町一村に一つづゝの支部、それを統轄する「市及び郡の聯合支部」それをまた統轄する「區聯合支部」こゝに「區」といふのは選舉區のことで、養正會の事業の達成は、一に我等が衆議院に多數を制することにあるのだから、随つて選舉區の支部といふも

のが、一地方における活動の基礎となるのである、こゝ四五年のうちには、日本全国の市町村全部に支部が出来るが、それが「市郡聯合支部」及び「區聯合支部」に統制されて組織を完成する時、それこそ眞に強大な團結、日本を完全にしよつて立つ團結となる、それといふのもこの組織の完全さによるのである。

「徹底せる方法」……會員増加の方法といひ、支部組織の完備といひ、議會進出の態度といひ、どこまでも徹底せるやりかた、これなら必ず出来るといふやり方。

「確實なる期限」……どんな仕事も、期限がなかつたら無責任になる、まして養正護國の大業をや、これが出来る出来ないとは、日本の興廢に關する重大事である、日やり番じよにやつてゐてい、事ではない、そこで期限をきる、背水の陣を布くのだ、我等が企圖する日本の改造、新日本の建設は、昭和二十一年までに必ず完成すること。

「不變なる方針」……組織や方法や期限、さういふものがちやんと備つて、

これなら出来るときまつたら、また、これでなければ出来ないときまつたら、一切の方針を變更しないことだ、既成政黨の様に一發のピストルに避易して態度をかへたり、無産黨のやうに、滿洲事變で變節したりする様なイクチのない態度ではだめなのだ、だれが何といはうとも、時勢がいかにかに我れに非であらうとも、世をあげて我が計畫を否難しようとも、いいと信じた事はやめない、變へない、それでなければ仕事はできない、それだから養正會は強いのだ。

「嚴たる統制」……それといふのも、その團體の統制において、東西古今に比なき嚴烈さをもつてゐるからだ。「總裁の命令は絶対なり」は、養正會員における金科玉條だ。

「みことなる融和」……それほどきびしい統制が、どうして不平なく苦情なく行はれるか、それは勿論會員のすべてが、護國の忠誠と責任とを自覺するからだ、しかし根元團結の融和にある、總裁と會員との融和、會員相互の融和、これはいかなる團體にもみられない美さである、このかぎりなき融

和において、嚴たる統制はいともみごとに行はれるのである。

「驚くべき執著」……あきつぽかつたら事業はできない、それからそれへと仕事をかへたら事業はできない、石にかぢりついてもやらうといふ執著が、養正會の事業に對する熱情である。

「無限なる永續」……執着があればこそ續く、途切れたら事業はできない、出來あがるまでは續けるのだ。

(以上の事々、例をあげればよくわかるのだが、この小冊子ではさういふ事もできない。それらはすべて近刊の「立憲養正會團結の意義並びに特質」にゆづる)

「事業實現の確信」……これについては後にいふ。

とにかく以上の條件がそろはないと護國の事業はできない、そこで私は、國をおもひ、國を愛し國を憂ふる我が同胞諸君につげるのである、「國をあげて立憲養正會に聚れ」

この方法とこの團結の外に、今さしあたり國家を眞に富岳のやすきに置きうる團體はないのである、この國を、實に安らかな國にしたいと思ふなら、

必らず養正會へおはいりなさい。國をあげて養正會へ聚れなどと、甚だ不遜の様であるがさうでない、事實この外に國家民生を救済打開のみちはないからである。

至誠だけではだめ、熱情だけでも駄目、國をおもふ至誠と熱情とが、誓願となつて、その誓願が事業となつて、はじめて國は救はれ、本當の日本が建設されるのである、勿論、以上にのべた条件を具備した團體がほかにあるならそれで結構、また、以上の条件をみて、なる程とおもつて、新に護國の事業をはじめるとしても結構、ではあるが、新しくはじめるといふことは、何をやつても仲々うまくゆかないものである。しかも國家の危急こそは、まさに焦眉の急ではないか、グヅ／＼してゐる時でない、小さな感情などはすべからく一排して、はやく國家を救ひえられる事業へ参加するのが、忠良なる國民としてのつとめでなければならぬ。それだから「國をあげて立憲養正會に聚れ」である。

四、事業實現の確信——正しい力の自覺

方法がよく組織がよくなかつたら仕事はできない、しかし方法がよく組織がよかつたらそれで仕事ができるかといふと必ずしもさうとはいへない、どんなに方法がよからうとも力のない者には大きな仕事はできないからだ、勿論、方法や組織が、力を補ふには補ふが、何といつても事業を成す責任者は人であり、人の團結であるのだから、その人間と人間の集團に、事業實現の確信がなかつたら駄目な話だ、その確信から生ずる力がなかつたら、いくら方法があり組織があらうとも駄目な話だ、その點において養正會は、驚くべき力をもつた、過去現在に類例のない一大團結である、新日本建設といふ如き曠世の大業を、實現完成しうる確信をもつて、主義の命ずる儘に勇往邁進する、一あつて二なき強者の團結である。

養正會の團結は、あらゆる意味において、前例を破つた團結である、大ていな團體は、何かしら、前にあつた團體の例によるが、養正會は全然さうい

ふもの、例によらない、それは、根本の主義主張並に方法組織において、よるべきものでないと共に、さういふ意味を離れても、いづれは亡びゆく既成政黨や無産政黨の前例などは、よるべきものではないからである、正しい日本國民が、護國の誓ひと忠誠とを全ふせんが爲に、正しくそうして強大な團結をつくらうとした例などこれまでの日本にない、生命財産を犠牲として國を護らうといふ者が、幾十萬幾百萬と結束しようとする團體など、これまでの日本にないのだ、よるべき前例がないといふことは、過去の例がみなすべて駄目だったからである、駄目なことをまねすれば、餘計駄目なことはわかりきつた事である。

みよ、危機とか非常時とかいひながら、どこにその危機をすくひ非常時を打開する様な力強い存在があるか、政友會は、議會の絶對多數を有した日本第一の大政黨である、絶對多數といへば、したいとおもふ事は何でもできる力の所有者でなければならぬのに、政府の打倒はおろか、自黨一つをまとめる事さへ出來ずにある、早晚分裂、早晚崩壞のほかはない、何の爲に絶對

多數を制したのだ、それについて予は政友會が絶對多數を制した時に、崩壞するのには、大きければ大きいほど崩壞のしほえがあるからだといったが、政友會の現状は、全く予の言葉を證據だてんが爲の存在であるにすぎないではないか、無力といつてもこれほどの無力はなく、さすがにその無力に比すべき無力は、これを發見するに苦しむ程だが、幸ひにもたゞ一つ岡田内閣あつて、その徹底至極せる無力ぶりにおいて政友會とのよき對照をなしてゐる、民政黨、國民同盟これらはいふにも足らぬ、若しそれ最近の無産黨なるものに至つては、これはたゞ人をして、そゞろにも、あはれを感じせしむる存在にすぎない、かつては主義とか主張とかいつたものが、さうして鬭争々々と強がつたものが、此間の縣會選舉には、たゞ既成政黨的泣き落としと叩頭哀願のほか何もなかつたといふ、それでも男かときかかれたら、一たい何と返事をするつもりだ。

み來れば政界人のやり方、餘りにもいくぢがない、なさすぎる、尤もこれは日本だけの事ではない世界をみわたしてもやはり本當に力のあるものはな

い、國際聯盟の無力はいふまでもなく、力あるかの如き勞農ロシアも、しばしばその方針をかへなければならず、ナチスはヒトラーの獨裁かとおもへばそれにはシヤハトの強力なる對抗對立あり、ムソリニもエチオピアの戰爭に鼎の輕重を問はれては、まさに崩壞の危機に臨めるものといふべく、英佛は對伊制裁によつて、却つて内閣の危機を招來した、みわたせばいづこも同じ秋の夕ぐれ、おもへば世界は、餘りにも無力な博覽會だ、要するにドンダリの背競べであるにすぎない。

我れ等は限りなき力をもつてゐる、我れらは強者なりといふ確信をもつてゐる、なぜ我等は強いのか、強くなかつたら、養正護國の大業はできないからだ、日本臣民たるの忠誠を全ふすることができないからだ、天皇宏大の御恩徳を報じ奉ることができないからだ、そこで分ることは限りなき力も、強者の確信も、たゞ 天皇をおもひ奉るといふことによつて生ずる力であり確信であるといふことだ。

天皇をおもひ奉るといふことによつて 天皇宏大の御力が、ありがたくも

我等の上に加はり來つて、發動すればこそ、その力は眞に測り知られず、そこに護國の大業完成といふ確信が生れる、その確信によつて、我等は、「國をあげて立憲養正會に聚れ」と、聲高々と叫ぶのである、これこそ日本の黎明を上げるあげほの、聲である。

昭和十一年二月九日印刷【定價金七錢】
昭和十一年二月十一日發行（送料二錢）

著作兼 發行者 田 中 澤 二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二
大日本印刷株式會社

印刷者 根 本 力 三

發行
東京澁谷代々木初臺町六三二
養正時評社書籍部
振替東京二八六六五番

改訂増補第三版 第一萬四部刷 出來

日本改造の具體案

定價十五錢

(送料六錢)

日本政界の現状を見て、その根本改革の必要を痛感せざるもの果して幾人ありや。されどそれは抑々如何なる方法によりて爲し、何れの人によりて行はるべきものなりやの間に對して、斷乎として確信ある回答をなし得るもの、將又幾人ありや。たゞその必要に迫らるゝのみにて、その人と方法とを辨へざるもの恐らくは國民の大部分ならん。茲に於てか「日本改造の具體案」の大々的普及は刻下日本の最大喫緊事なり。げに今日の日本を救ふべき方策は、本書に示されたる立憲養正會の根本的國策を實現するの唯一途あるのみなり。即ち日本將來の運命は懸つて以て此の一本の裡にありと稱するも決して過言にあらず。國を憂ふるの士天皇精神に基ける大日本帝國の改造を望むの士は必ず本書一本を備へて皇國の將來を祝福せよ。

東京市澁谷區代々木初臺町六三二

養正時評社書籍部

終

5